

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷九十三第

行發日一月八年九和昭

哀辭
故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論叢

骨牌税に就きて……………法學博士 神戸正雄
供給曲線の性質……………文學博士 高田保馬

時論

輸出統制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

貨幣的景氣論史……………經濟學士 柴田敬
金物價と貨幣價值安定……………經濟學士 松岡孝兒
アダム・スミスの廉價即豊富論……………經濟學士 白杉庄一郎

記事

田島博士逝く
故田島博士年譜及著書論文目錄
追憶文

織田 萬 神戸 正雄 山本美越乃 財部 靜治
河田 嗣郎 本庄 榮治郎 小島昌太郎 大國 壽吉
汐見 三郎 黒正 巖 田島 順 石川 興二
谷口 吉彦

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

今や忽然として白玉樓中の人となられた。兩博士の亡くなられたのは獨り學界のみならず我國のスポーツ界から東西の兩明星を失つた事で斯界愈々事多からんとする今日、惜みても猶あまりある損失である。

そうして兩先生とも私に取つては忘れられない恩人で此の夏休みには東京に行つて岸先生の御墓に詣り又久しぶりに田島先生を訪ねて私の元氣になつた顔を見せて喜んで頂かうと思つて居つたのに。それもならぬとは悲しい事である。

今何か先生の思ひ出を書かうとすると、先生ありし日の事どもが澤山彷彿として腦裏に浮び出で彼是選擇に苦しむ次第であるが、その中から三つ四つ。

(一) 田島先生が京大のスポーツにどれだけ貢獻せられたか、そんな事は私が書くまでもないから略する。先生のスポーツ界に對する功業は獨り京大に對するのみならず全關西、否全日本に及んで居る。そうしてそれは重に漕艇と陸上競技であつた。(劍道弓道は別として)

明治廿七年時の三高教授野村彌三郎氏が中心となり

田島先生の思ひ出

大國 壽 吉

私は昨夏、病を獲て本年四月まで或は病院に、或は温泉に暮したのであるが、其の間に態々二度までも病床を見舞つて下さつた東京の岸清一博士は十月の廿四日に、又度々御親切なる御見舞狀を頂いた田島先生は

滋賀縣知事を會長として大日本聯合端艇競漕會が創立せられ毎年七月、大津に於て盛大に全日本的な競漕會が催されて居つたが野村氏が岡山縣書記官として去るに及び中心人物を失ひ中止の已むなきに至つた。然るにその翌三十三年秋先生が歐洲留學より歸朝して法科大學教授となられ、右の競漕會の中止を残念がられ早速大日本武徳會の副會長たりし、時の大學總長木下廣次先生と謀り遂に武徳會をして全日本的な競漕會を主催せしむるに至り、先生自らは常に委員長として斡旋せられ遂に大正九年まで此の競漕會を繼續せしめられた。此の間數年、私は先生の下に委員として働いたが先生の御熱心なる旬日の久しきに亙り吾々委員と共に湖畔の安宿に合宿せられ骨身を惜しまず些細な事まで御指圖下された。

而して大正十年武徳會が僅かな經費の點で此の競漕會を中止せんとするや、先生は自ら中心となり荒木寅三郎、森島庫太の兩先生等と共に國際漕艇俱樂部を創立せられて此の事業を繼承せられ、後之を京大漕艇部

に引き繼がれた。

又大正九年に日本漕艇協會の創設せらるゝや先生は推されて關西支部長となり關東支部長と毎年交代して會長を兼ね、常に國際的な努力を惜まれなかつた。かくの如く先生の漕艇界に於ける功績の詳細はとも筆紙のよく盡す處ではない。

(二) 陸上競技界に於ても先生は關西の大先達である。我國でクロスカントリーやオリムピック等いふ文字の冠せられた競技會はいづれも大阪毎日新聞社の創めたもので明治の末年から大正の初年にかけての事であつた。當時では陸技は漕艇よりもつと開けなかつたので審判の權威がなかく保たれず競技會毎に随分いまわしき問題で閉口して居つた。

明治四十四年の初夏大阪の十三じゅうさんを發走點とし箕面公園を決勝點とするクロスカントリー、ランニングが大毎によりて主催された。先生が審判長として出席せられ私も審判員として御伴した。當日は二百八十餘名の競走者が二列横隊に並んで同時に十三の河原をスター

トするので、先生と私とは發走線の後方にしつらへた櫓の上に立ち、競走者と同列に立つて整頓を監督せらるゝ大井清一、木下東作兩審判員の合圖を見て、先生と私の手にある爆彈の紐を引きスタートの合圖をする事になつて居つた。名譽會長菊池大麓先生（大學總長）と會長一戸兵衛大將（第四師團長）とは先發して箕面に行かれたが顧問たる知事と市長とは出發の壯觀を見んものと審判長に無斷で審判臺に上つて來た。勿論惡意のあつた譁もなく當時の事として審判の權威などといふ事を深く考へずに上つて來たのである。此の時先生は毅然として兩氏に少くとも審判員より一米突は後方に起立して觀覽する事を要望せられた。之を見て私等はとても緊張したもので誠に些細な事の様ではあるが、先生の一舉一動は常にスポーツ界を啓發する處があつたのである。

(三) 終りにスポーツとは事異なるが先生の遺徳を忍ぶ爲め、多少不確な點は御許しを乞ふとして故市村光惠先生と關聯した思ひ出を二つ書かうと思ふ。

追憶文

一は忘れもしない大正四年夏の事、私がジャバ、ボルネオの旅から歸つて直後、京二中に校長中山再次郎先生を訪ねた處が、來た序だから生徒一同に南洋談を頼むとの事であつた。その折柄市村先生より電話がかゝり田島先生と兩人で疏水の「新三浦」に待つて居るかゝら邪が非でもすぐ來いとこの事。即ち中山先生に謝して雨の中を直ちに「新三浦」に行つた。兩先生とも御待ちかねで久しぶりの對面の事とて可なり酒もはずんだのは勿論。

此の時市村先生が「田島先生には僚も頭が上らぬぢや」と前置して話し出された事がある。

それは法科大學在學生で市村先生と同郷の某君が學資に事缺くに至りたる時、市村先生がやはり同郷の大先輩で後には大臣にもなつた事のある某氏にその出資方を懇望せられしが話はまとまらなかつた。某氏は而かも「市村にたのまれて學生を世話して居る」といふ様な言辭を弄した爲め市村先生の激怒を買ひ、後年郷里に立候補した際市村先生一派にひどく攻撃せられた事

も一因となつて遂に落選の憂き目を見たとか云ふ。此の様な出資不可能となつた事を耳にせられた田島先生は自分の未定稿而かも半分だけのものを急に書肆に渡して金に換へ、それを以て其の學生に學資を給せられたといふので、市村先生は「學者が未定稿を金に換へる等いふ事はとても忍びない事である、それを田島先生が一學生の爲めに敢てせられたのだから」と涙を流さん計りに物語られた。

今一つは私が附屬小學校卒業の故を以て京都師範出身の某君と相識り、従つて某君も市村先生を知るに至つた。某君はなか／＼の交際家で或る日、現在我國財界に羽振りのいゝ×氏と面會した時×氏が話の中に「田島君」といふ言葉を用ゐた由で、後日某君が私と會つた時×氏と田島先生との關係を尋ねたから私は「×氏は先生の弟子で而かも養子に行く時御世話になつた様に聞き及ぶ」と答へて置いた。

それから後の事、私とその某君とが市村先生の御宅で落ち合ひ、其處へ偶然田島先生が御出になり遂に酒

座となつた。此の時某君が×氏が田島先生の事を「田島君」と呼んだ事を語り出した爲め、血の氣の多い市村先生は例の調子で「實に怪しからぬ舊師に對し君呼ばわりは以ての外だ」と慷慨悲憤。之を見て田島先生は「そりや君、僕だつて話に興が乘れば伊藤だの彼れ桂などと呼び捨てもするさ」と巧みに話をそらして溫容そのものの如く杯をふくまれた事を記憶する。

右二つ先生と市村先生と關聯した思ひ出を書きたるが、兩先生とも私に取つてはどうしても忘れられない恩師。而かも兩先生今やなし。嗚呼悲しい哉。